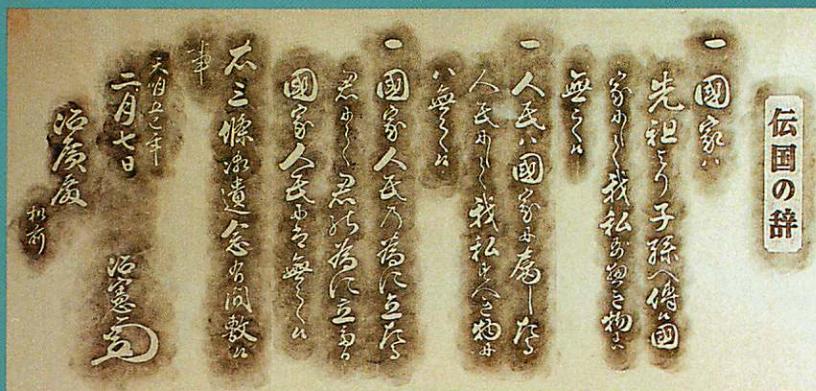


興

讓

47



平成14. 3
2002

表紙の写真

傳國の碑（拓本）

鷹山公が天明十五年（一七八五）、治廣
公に家督を譲る際に与えた藩主の心得で
ある。白子神社（市内城北）境内に碑が建
立されている。（本文二十頁参照）

興 譲

47 号

2002.3

山形県立米沢興譲館高等学校

田 次

卷頭言

明日に向けての自己評価

校長 卷

久 1

創立百十五周年記念講演

興譲館の心 名古屋大学大学院工学研究科教授 椿 淳一郎

(本校昭和四十一年卒) 7

特集 I 鷹山公と私

歴史の重み

過去の鷹山から未来の誰かへ

地理歴史科教諭

藤原

一

彦

歌織

一

年

20

19

二年六組

山田

一

歌

一

織

一

年

22

20

19

米沢南原在住

窪田

一

子

とし子

一

年

24

22

20

19

暮らしへ生きる鷹山公の心

地理歴史科教諭

藤原

一

彦

歌織

一

年

24

22

20

19

窪田

一

子

とし子

一

年

24

22

20

19

窪田

一

子

とし子

一

年

24

22

20

19

窪田

一

子

とし子

一

年

24

22

20

19

Of Onsen, Shinkansen, Natto and Kimono

Doris Hough ALT

脚本作りの喜び、演劇の快樂

—創作脚本奨励賞を受賞して

演劇部 二年一組 高橋 優介 30

特集 II 我が高校生活に悔いなし

G O 三年一組 伊藤 利彦

鏡とにらめっこして考えたこと

全員野球 野球部マネージャー 三年五組 細越 哲朗

試合は無心で、稽古は考えて

—剣道・熊本インターハイ出場 —

剣道部 三年一組 三條 恵介 40

38 36 34 33



デザイン／美術部 2年4組 相馬史子

職員住所録
編集後記

読書感想文

「みんないつてしまう」を読んで 一年二組 樋口智子
精神と肉体の関係－「脳内改革」を読んで 二年二組

2009年 2月

高橋航太朗

44 42

大学入試概況と本校生の進路状況

進路指導課

手塚武田 蹤一雄

第五十二回全校マラソン大会

体育科主任

二〇〇一 自治会活動の記録

二〇〇一 文化部活動の記録

二〇〇一 体育部活動の記録

二〇〇一 大会・コンクール等の結果一覧

卒業クラスの横顔

贈る言葉 興譲館を巣立つ諸君へ

第三学年主任

感動する心を大切に
「おおきな木」のように

三年一組担任

ドーパミン

三年二組担任

三年三組学級通信最終号

三年三組担任

「人」との出会い
3年5組とは……

三年四組担任

私の気持ち

三年五組担任

ーあるがままの自分をさがして

三年六組担任

刮目して人を待て

第三学年副担任

大切なものの贈る言葉として

第三学年副担任

中齋開田高庄佐 川藤沼代世司藤 玲幸浩智弘 英子 司二行美伸司

加佐小 地原関 信俊雄 彦博一

126

152149 147146145144142141140 139138137 120 98 79 67 57 47

152149

◇創立百十五周年記念講演

興 譲 館 の 心

名古屋大学大学院工学研究科

教 授 椿 淳一郎 氏

(本校昭和四十一年卒)

みなさんおはようございます。昭和四一年卒業の椿淳一郎です。お話をさせて頂く前にまず本日このような名誉ある機会を与えて下さいました巻校長先生、川野同窓会長、われわれ昭和四一年卒業同期会の相田会長、それから同期の皆様に御礼申し上げます。今日は皆さんに「興譲館の心」と題してお話をさせていただきます。

旧友と娘の一言

最初に本日の講演にいたるいきさつからお話をさせて頂きます。今年の一月二〇日の土曜日、晚酌を始めようとした時に電話がきて、秋の同窓会で何か話してくれとの内容でした。いま大学では理科離れが進んでいるということもありまして、名古屋大学でも我々が直接、母校やあちらこちらの高校を訪ねて、お話ししています。ですから今回も、



理学と工学とはどう違うのか、工学部にはどのような学科があるのか、どのような専門分野があるのか、さらに私の研究などについて話をすればよいなと思って、割合気安く引き受けたわけです。しかし、後で気がつきました、聴衆が理系志望の生徒だけでないことに。一年生や文系志望の生徒に何を話すか、私はあわてて本屋に行き今の高校生に関係する本を買いましたが、考えがまとまりません。気安く引き受けたことを後悔している時、高校生の娘が「お父さんはどんな高校生だったのか、そして、どこでどんな暮らしをしてこんなデブのおじさんなつたのか、そういう話を聴きたい」とアドバイスしてくれました。自分史でよければと気が楽になり、それから準備を始めたような次第です。

何を話すかは、一月二〇日の電話が大きなヒントになりました。電話をかけてきた酒井君は「おまえは、高校の頃勉強しねえがつたもな」と言いました。私はそれなりにたつもりですが、まあまあ上位の方という成績でした。これは高校のアルバムからとってきた三年生の進路相談の写真です。各クラス一枚ずつありますが、我々のクラスは偶然にも私の母でした。この表情からすると、あまりいい話ではありませんね、深刻な顔をしています。私はこの場所にいませんでしたからわかりませんけれども、担任の木村

高校時代



3年進路相談
スナップ

先生は「この成績では、山大も危ないない。」とおっしゃつて、母親が「あらあ、なんだべえ。」と応えていいるようです。結局、現役・浪人と二度山形大学に合格しましたが、第一志望の北海道大学は結局合格できず、旧帝大のレベルの高さを身にしみて感じました。にもかかわらず現在、旧帝大の一つである名古屋大学の教授を務めている。これが今回お呼びいただいた理由のようです。昭和四一年卒業の中で誰に講演を頼むか、私より活躍しておられる方はたくさんおられます、皆さん高校時代から成績優等で順当に活躍しておられる方々ばかりです。ところが私の場合は、高校時代のあの成績で何で名大の教授だ、何があつたのか、椿なら何か面白い話をしてくれそうだ、と言うことで今日ここに呼んでいただいたようです。それで今日は、なぜ入れなかつた大学の教授になれたかというお話をさせて頂きたいと思います。

おいたち

私は一九四七年一一月六日に生まれました。父親は興譲館の化学の先生でして、米沢工業の校長をしましてもう亡くなりました。母は、茶道の師範でありまして、現在も元気しております。私には姉が三人おりまして、私と違つてみな優秀でした。私は西部小学校、米沢三中を卒業して興

談館に入りました。大学入試では第一志望に入れませんでしたから、予備校に行くことになりました。私は誰でも入れる代々木ゼミナールに行き、一年勉強しましたが、北海道とは相性が合わないらしく、山形大学に入学して卒業し、その後名古屋大学の大学院に入りました。修士、博士といきまして助手として残り二年ほどアメリカへ行き、そして日本へ帰りました。大学のポストは埋まつていて、大学にいても見込みはないということで、ファインセラミックセンター（JFCC）という所に行つたわけです。大学を辞めますよと言いますと、一つ上へポストをあげてくれますから、ご祝儀で助教授にしてもらいました。私は助教授を三ヶ月やり、そのあとJFCCに七年ほどいまして、どういうわけか名古屋大学に戻つてこいと呼び戻されたわけです。これがおいたちの概略です。

職員室の奥深く

それでは、私の高校時代から話をしていくことにします。この写真は白布マラソンの写真です。一年生で、なぜか優勝してしまいました。一年生がクラス対抗で優勝というのは画期的なことであります。その夜は担任の土澤先生も含めて、枕投げをしてお祝いしたという思い出の写真です。父の影響があつたせいか、クラブは化学クラブ

高校時代



白布マラソン優勝(1年生)

に属していました。一年の時はクラスで一、二を争うチビでしたが、応援団に選ばれてしまいました。二年生の時は化学が面白く、クラブ活動に明け暮れていました。球技は全くダメで、登山やスキー、釣りなどの自然に親しむのが好きで、部員ではありませんでしたが、山岳部の山行に連れて行ってもらつたこともあります。三年生になり、受験勉強をそれなりにやりましたが、この時期になると自己に目覚め始め、いつたい自分は何だろうという疑問が生じ、自分探しの時でした。「山のあなたたの空遠く／幸い住むと人のいふ／ああ、われひと尋めゆきて／涙さしぐみ、かへりきぬ／山のあなたたになほ遠く／幸い住むと人のいふ」という有名なカール・ブッセの詩がありますが、当時我々は、ゴジラとあだ名された国語の先生によく職員室に呼び出されていました。それでこんな替え詩が流行っていました。「職員室の奥深く／ゴジラが住むと人のいふ／ああ、われ友と呼び出され／涙さしぐみ、かえりきぬ／職員室になほ深く／ゴジラが住むと人のいふ」この替え詩のおかげで、元詩まで暗唱してしまいました。山のあなたたに、単純に「幸い」があるとは思つていませんでしたが、山のあなたの空遠くに「何か」があるのだろうと思つていました。その「何か」とはうまく言えませんが、そこに行くと自分を待つてくれるもので、そこに行くと自分も満足

てきて、人の役に立つ「何か」があるだらうと夢を見ていました。

私は大嶺吾妻の夕焼けを見るのが大好きで、紫から黄昏色に変化していく山並みに息を呑みながら。山のあなたの空遠くにある「何か」をぼんやりと思つていました。受験を迎え、よし山のあなたの空遠くにある「何か」を探しに出かけようと思いました。山のあなたの空遠くですから、米沢盆地にはない、少なくとも吾妻を越えなければと思つました。しかしそれは間違いで、米沢盆地にもたくさんの「何か」があることが、年齢を重ねるにつれわかつてきましたが、当時は「何か」は山のあなたにしかないと思つていました。それで「少年よ大志を抱け」という言葉に惹かれ、北海道に行こうと決めたわけです。そして北海道大学を受けましたが、『桜散る』という結果でした。それでも北海道大学へ行きたいと親に相談し、代々木ゼミナールで勉強しました。模擬試験では常に合格安全圏でしたが、実際に受けみると、またしても『桜散る』でした。高校の校長をしていた父が問い合わせたら、一点差でした。私も落ち込みましたが、父はそれ以上だつたようです。それで、山形大学工学部へ入学となつたわけです。

高校生

山のあなた カール＝ブッセ



山のあなたの空遠く、
幸い住むと人のいふ。
ああ、われひとと尋めゆきて、
涙さしぐみ、かへりきぬ。
山のあなたになほ遠く、
幸い住むと人のいふ。

何か

- ・自分を待っていてくれる
- ・自分も満ち足りて
- ・ひとの役に立てる
-

大嶺吾妻の夕焼け

山のあなたの空遠く

試験前の「親友」

大学の教養時代は夢と希望に満ちてと言うわけにはいかけず、コンパにパチンコ、工事現場でバイト、こんな生活をしていました。大学には当然試験がありますから、パスしなければなりません。それで、試験前にはまじめな学生と突如として「親友」になるわけです。超低空飛行の成績でしたが、何とか無事に山形から米沢に来ることができました。このころは大変荒れた生活をしていましたが本も読みました。ロマン・ローランの「ジャン・クリストフ」とか、大作と呼ばれるものを読みました。米沢に来て二年生の春に、パワーアップして大変身しました。なぜ大変身したかというと、私の父がその頃に亡くなりました。その時、私は父から「俺の命をやるから、しつかりやれ」と最後の励ましを受けたような気がしたのです。このおやじの一言で、何かが吹っ切れました。それからは遅れを取り戻すべく、しゃにむに勉強しました。そんなわけで山形時代とは反対に、試験前になると「親友」になりたがる友が増えました。

勉強しすぎて死んだ人はいない

三、四年生の頃は、四日市喘息、イタイイタイ病、水俣病など高度成長のひずみが現れ始めた時期がありました。

三年生の時に、科学技術は本来人を幸せにするものなのに、どうして多くの人の命までも奪ってしまうのが、なぜだろうという疑問がわいてきました。私はこの時、公害を出さないような科学技術の研究をしたいと考えました。高校の頃に考えた「何か」が少し具体的になってきたわけです。これは今にして思えば、途方もないことです。が、若い頃は純粹に大きなことを考えることができます。それで専門だけでなく、科学・技術と社会の関係や歴史などの本も読み出しました。その中に大変感銘を受けた本がありましたので、大学院に進学したいが、著者と同じ考え方の先生を紹介して下さいと、年末ではありましたが著者に手紙を出してみました。そしたら、正月三日に返事をもらい、東京大学と名古屋大学の先生を紹介してもらいました。東京大学は逆立ちしても無理だと思い、名古屋大学なら万に一つといふことでもあるかもしれないということで、名古屋大学の神保教授に手紙を書きました。四年生の春に名古屋大学に神保先生を訪ねてみると、大変歓迎して下さりお土産に入試の過去もののコピーを頂戴してきました。

お土産までもらつては、合格できないまでもみつともない成績はとれない、大変なプレッシャーになりました。新たな技術体系を作るには、技術の歴史を勉強しなくてはと技術史研究会を作りました。それに七〇年代は学園紛争

の時代でもあり、私も巻き込まれました。そして、四年生になつて卒業研究が始まりました。これではとても受験勉強ができないと思い、卒研指導の八嶋先生に、大学院受験が終わるまで、卒業研究を延ばしてくれないかと頼みました。先生の返事は「今まで勉強しすぎて死んだ人はいない。卒研も受験も何やら怪しげなことも、全てやり遂げたら君を認めてやるう」でした。それから、朝に昨夜のデータは、昼に午前のデータは、夕方に午後のデータは、と毎日厳しく指導されましたが、明け方まで酒を酌み交わし、気がついたら先生のベッドで寝ていたこともありました。この時に、八嶋先生から学問するとはどういうことを、教えていただいた気がします。一夏で五キロ瘦せましたが、先生のお言葉通り死ぬこともなく無事大学院に合格しました。旧帝大は私には無縁の世界と思つてましたので、大学院ではあります名古屋大学に合格できて、素直に嬉しく思いました。八嶋先生の励ましもあって、私は学者になろうと決めました。高校三年生のときに抱いていた「何か」が、少しずつ形を現してまいりました。

陶工の世界を現代産業に

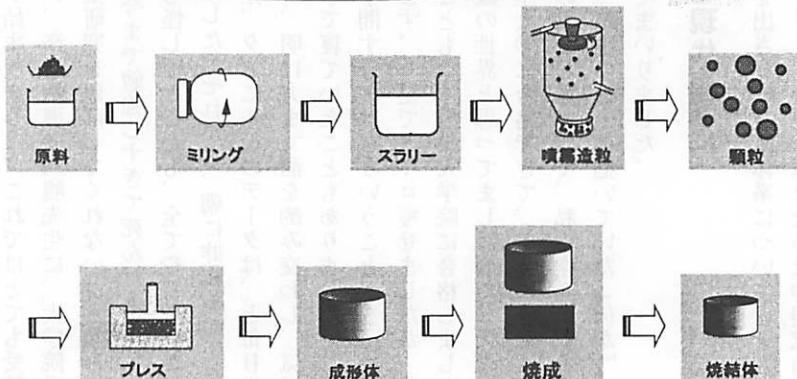
大学院では公害を出さない技術体系について研究しようと考えて、イタイイタイ病の発生源となつた神岡鉱山の調

査にも、神保教授のお供で参加したりもしました。神岡鉱山には今でも関係していますが、住民・鉱山・学者の連携プレーで、神岡鉱山はその後、公害を出さない模範的な鉱山に生まれ変わりました。人々の生活に役立つよい研究をするためには、科学技術とは何かを知り、自然科学や科学哲学、科学方法論などを知らねばならないと勉強しましたが、肝心の自分の研究はテーマすら設定できない状況でした。そんなとき、八嶋先生から下宿に電話がきました。電話に出ると、いきなり「きさま、何をやつてるのか！」と怒鳴られ、目から鱗が落ちる思いでした。研究もしたことのない人間に、良い研究も悪い研究もない。良い研究を云々といえるのは、研究能力のある人が言うことで、私にはとてもそんなことを言う資格がないことに気づきました。そこで私は、とにかく論文を書くことに専念しました。研究能力が少しづつ身に付くにつれて、公害問題は教育の対象になつても、研究のテーマにはならないということに気がつきました。つまり生産に役立つ技術は同じよう公害にも役立つし、公害に役立つ技術はそのまま生産技術として役に立つ、ということです。そこで初心は変えませんでしたが、「公害」にこだわることをやめにして、微粒子や粉体の研究に専念することにしました。徳儀に足が掛ながらも、何とか工学博士の学位を取得して、神保研究室の助

JFCC時代(39~46才)

1987~1994年

原料から焼結体まで、全てが粉体プロセス



手に採用されました。

助手時代は、体力もありましたし、研究能力も身につきましたから論文なんかいくらでも書けました。しかし、論文の数が増すにつれて、自分の研究が一体世の中の役に立っているのか、迷うようになりました。そこで、私はできて間もないファインセラミックセンター(JFCC)に移りました。自分の学問が本当に役に立つか、試してみたいと思った訳です。JFCCに移った理由には、大学にはポストがなくこのままいても、助教授にもなれないと言ふ現実もありました。肩から下げるほど大きかつた携帯電話が、手の平にはいるケータイになったのは、ファインセラミックスのおかげですし、車にもいろんな所にファインセラミックスが使われています。ファインセラミックスがなくなると、私たちの生活が成り立たなくなるほど、大変重要な現代の最先端焼き物です。ところが、この製造技術は、昔ながらの焼き物である陶磁器の世界とあまり変わらないのです。陶磁器では粘土をスラリーと呼ばれる泥にします。ファインセラミックスでは化学的に合成された純度の高い微粒子を、水に分散させてやはりスラリーにします。そして製品である焼結体まで、ずっと粉体のままで工程を流れるわけです。この工程で起きている現象があります。そして製品である焼結体まで、ずっと粉体のままであります。そこで、まだに経験が幅を利かせている世

界です。わたしは微粒子と粉体の研究をしてきましたから、

ても全力を出しません。

こここそ我々がお役に立てる世界だと、自分の学問に確信を抱いたわけです。自分の専門で、陶工の世界を現代産業

にできると思ったわけです。そして大学に戻つてからは、一貫してこのスラリーの研究をしているわけです。しかし、JFCCの第一義の仕事は、学問研究ではなく評価技術の標準化です。大変地味なことですが大変重要な仕事です。多くの人が華やかなテーマをやりたがるなか、私は率先してJFCCで標準化の事業を立ち上げました。具体的には、粒子径計測技術の体系化を行いました。粒子の大きさを計測するのは困難なことです。国際協力の日本代表を務めたり、たくさんのJIS規格や世界規格であるISO規格も作りました。

そんな時、名古屋大学から戻つてこいとの電話があり、名古屋大学での教授時代が始まります。なぜ電話があったのか。その理由の一つが、JFCCの第一義の仕事をしたということです。誰かのまねごとでない、自分で自分の土俵をつくったわけです。もう一つは、大学へ戻るための仕事ではなく、JFCCのための仕事をしたことだと思います。名大に戻せば、今度は名大の第一義のために全力を尽くしてくれる、という安心感があつたのではないかと思います。その場その場で全力を尽くさない人は、どこへ行つ

大嶺の夕焼け

ここまで一通り講演の筋を考えたときに、なんとかどこかで聞いたことがあるような話だなと思いました。それは、興譲館の校歌です。これは浜田広介先生直筆の米沢興譲館高校校歌ですが、私の人生は、この校歌に書いてある通りだつたのだなと思ったのです。「大嶺の吾妻を見れば／青空にたたなわる／雲白く望みぞそる」、私は白い雲ではなく夕焼けでしたが、雄大で荘厳な大嶺の夕焼けを見て「何か」を探しに出かけました。

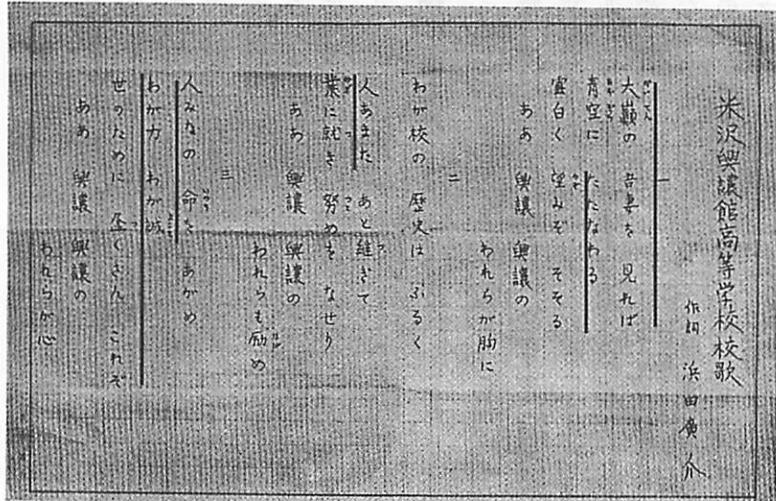
お 地 蔵 様

私が戻った大学は改革の嵐の中にありました。教養部の解体、教職員削減、大学院の定員増、教官の任期制導入、大学の独立行政法人化、遠山プランなどでした。この改革の背景にあるのは、競争と効率化です。大学教授としてどのようにやっていけばよいか悩みました。時流に乗つて勝ち組みになるか、それとも筋を通してやせ我慢するのか、一番いいのは、筋を通して勝ち組みになることです。私の研究テーマは華々しいものではありません、大変地味なものです。そのため、どうしても筋を通してやせ我慢になる

わけです。私は日頃の運動不足を補うため、週末できるだけ山登りや里山・旧街道歩き、サイクリングなどを楽しむことにしています。里山歩きなどをしていると、とても大きな石碑や石像に出くわすことがあります。それは立身出世した人の像ですが、多くの場合、一部欠け落ちたり傾いたり荒れ果てた状態でした。小さなお地蔵様に出会うこともあります。こちらは生花があり、いつもきれいに掃除されていました。このお地蔵様は人のために犠牲になつた人をまつたもののようです。

どうも人が人を本当に尊敬するのは、社会的地位や財力のせいではなさそうです。この人はマザーテレサですが、彼女がしたことはただ人に触つただけです。しかし触ることすら汚らわしいとさげすまれた人々にしてみれば、触られることによってどれだけ人間の尊厳が回復し、救われたことか。この彼女の行動が世界中の感動を呼び、世界中から多くの若者がはせ参じました。この人は、リュウ・カンスンと言つて、韓国ではお姉さんと慕われている人です。今年韓国を旅したときに知りました。彼女は、抗日運動に参加し一七歳で逮捕されましたが、説を貫き通しました。一七歳の少女が、がんばっているという姿が韓国の人たちをどれほど勇気づけ、日本帝國陸軍を震撼たらしめたか。これこそが、人間の尊厳、人間の偉さだと思いました。で

興讓館のこころ



すから、私もできるだけそれに近い生き方をしなければと、思いを新たにしたわけです。そう思つてもう一回校歌を見てみますと、ここに「人みな命をあがめ／わが力わが誠／世のために尽くさんこれぞ」とあります。ようやく私も、この歌詞の意味がわかるようになりました。こうしてみますと、私のこれまでの半生は、知らず知らずのうちに、興譲館の校歌に導かれて生きてきたようになります。

急がば回れ

大学改革を取り巻く時代背景は、国際大競争時代です。

日本は、科学技術創造立国であり、キーワードは競争と効率です。ここで競争と効率は大学での教育となじむのかどうか考えてみます。教育とは人が人として成長するのを助けることであり、私たちでできることは、みんなの成長を手助けしてやることです。具体的には個々人が自己を確立するのを助けることです。競争とはなじまないものです。競争となじむものは、資格認定試験のような知識の量を争うものであって、創造立国の創造とはなじまないものです。

研究には、個性的で独創的なものが求められます。それな

のに効率よく、テーマを決めてお金をあげましょと國が言つています。評価基準に合った独創性や個性しか認められなくなるわけです。独創性や個性は誰も評価できないか

ら、独創性であり個性であるわけです。評価できる独創性や個性などはないのです。高校の話に戻しますと、受験競争や進学競争があつて、これは、効率よく知識を獲得するかどうかにかかっているわけです。では効率よく知識を得れば仕事がうまくできるのか。大事なのは、もののことわり、必然性、なぜ、どうして、つまり科学する力を養うことです。知識を獲得したかどうかは試験をすればわかります。ところが、科学する力がついたかどうかのペーパー試験は極めて難しい。私は高校時代も、勉強したつもりではありました。成績がいまいちでした。しかし、学者として、いま学問の世界にいられるのは、高校時代に科学する力を養っていたからだと思います。米沢興譲館高校の教育は、科学する力を身につけさせてくれました。ただ単に物事を覚えるのではなく、その背後には何があるのかという必然性を教えてくれました。その当時養った力が、今花開いた感じがします。これが生きる力になつてていると思いま

高く大きな志を

いまみなさんは高校生ですから、大いに大巣の吾妻眺めて望みをもつてください。望みが高く大きいほどその望みを忘れる事はありませんし、意識しなくともその望み

に向かって努力します。そして、人の命をあがめ、わが力わが誠を世のために尽くしてください。結果は自然と付いてきます。

そして、二十一世紀の新しい興譲館の歴史をつくつて下さることを信じて、私の講演を終わります。

おいたち

1947年(昭和22年)11月6日生まれ

父 : 興譲館の化学の先生、米沢工業の校長(故人)
母 : 茶道師範
兄弟: 姉、姉、姉、私

西部小学校、第三中学校、興譲館

代々木ゼミナール

山形大学工学部化学工学科

名古屋大学大学院工学研究科 修士課程、博士課程

名古屋大学工学部助手

アメリカ留学

名古屋大学助教授

(財)ファインセラミックスセンター

名古屋大学教授



興譲 第四十七号

平成十四年二月二十六日 印刷
平成十四年三月一日 発行

発行者 米沢市大字笛野一、二〇一
米沢市立米沢興譲館高等学校
校長 卷 久

編集者 山根秀樹・開沼浩二

高橋 実・星 敦子

印刷・製本 (有)キヨウドウ印刷
TEL 二八一一〇四一

